

〈エッセイ〉

## フランスのパンク文学⑦：その後のパトリック・ウドリーヌ

Littérature punk en France (7): Patrick Eudeline 2017 &amp; 2020

市川裕史

はじめに

「フランスのパンク文学⑥：ベリユリエとは誰か」(第47号)以来10年ぶりのナンバリング、「『フランス大衆小説研究の現在』あとがき」(第54号)以来の登場だぜ。今回は、「大衆小説とパンクロック・カルチャー：パトリック・ウドリーヌとヴィルジニー・デバントの場合」〔以下、オレ2019と略す〕in 宮川朗子・安川孝・市川裕史『フランス大衆小説研究の現在』(広島大学出版会2019)で扱わなかった、ウドリーヌ Patrick Eudeline (1954-) のふたつの小説、『グレイパンサーズ』(*Les Panthères grises*, La Martinière, 2017) と『アヌーシユカ 1979』(*Anoushka 79*, Le Passage [sic], 2020) を扱う。オレ2019を書いたのは2017年夏以前なので、『グレイパンサーズ』はぎりぎり射程に入らなかった。この2作品は、フランスにおけるロック・カルチャー、前者においてはパンク以前のロック・カルチャー、後者においてはパンクロック・カルチャーを背景にしており、アンチモダンな文明論の要素が強いの、まとめて論じやすい。資料体の拡大によって、オレ2019で提示したポピュラー小説作家としてのウドリーヌ評価に少し修正が加わるだろう。もっとも、ポピュラーカルチャーを無視することがエリートの証だと信じている方々に分かるように論じられる自信は、ぜんぜんない。

2022年2月、フランス・サブカル雑誌の古豪「ベスト」(1968-1994)がパトリック・ウドリーヌを編集長として2度目の復活をした。1度目の復活(1999-2000)より長生きするだろうか…。このあいだYouTubeでウドリーヌ編集長のインタビューを見たが、ここでは、時代に寄り添うロック評論家としての側面ではなく、パンクロックをルーツとする小説家としての側面に絞りたい。また、オレ2019のような対比列伝にするためには、デバント『親愛なるバカ』(2022年8

月17日発売、オレはまだ入手してない)や、オレ2019「2.3.3：(デバントにおける)BD」の延長線上で、シャルリーエブド系漫画家リュズLuzによる『ヴェルノン・シュビュテクス①』BD翻案(2020)を論じるべきだろうが…。

『グレイパンサーズ』の物語

あらずじはfr.wikipediaで分かったことにしてね、というわけにいかない、以下、簡単にまとめる。背景は同時代のパリ・ピガール地区とリール(地方都市)、また、1970年頃のロック界が回想される。かつてロックに熱中した人々のその後、という構図は、デバント『ヴェルノン・シュビュテクス①②③』(2015-2017)と同じ。もっとも、デバントにおける回想パートが1980年代のオールタナティヴロックであるのに対して、ウドリーヌの登場人物たちにとってロックは既に1980年代に死んでいる。

一方ではギー、他方ではパトリックを視点とするダブルプロットが最後に交差する。

パトリックは1953年頃パリ生まれ(著者と同名&同年代だが、明らかに別キャラ)、五月革命に影響されて極左青年として様々なデモに参加し小学校教員になった。ミッテラン&社会党の裏切りにムカついていたが、定年退職後、2016年《寝ないで議論 *Nuit Debout*》を通じて極左的希望が心の中に復活した。2017年立法議会選挙で悪魔マクロンと対決するために立候補するようメランションから打診されたらどうしようと思っていたら、結局、打診されなかった。パリをブラブラするのが日課。

ギーは(たぶんパトリックと同年代)、1970年頃ムーンシャイナーズというロックバンドでギターを弾き、その後、地方都市で印刷業者として一定の成功を収め、結婚して息子1人&娘1人。妻は離婚後カナダ暮らし、ずっと失業している息子は音信不通、看護師の娘は男児を生ん

だあとウツになって早期退職。2017年、何にも関心がなく最低賃金店員として暮らしている（そしてギーから生活費援助を受けている）孫エンゾが、ビジネスアドバイザーとして企業の節税対策をしているマクロン支持者の女性シャロンと結婚することになる。退職してブラブラしているギーは、結婚式の余興としてムーンシャイナーズを復活させることを思い付き、オリジナルメンバーのディディエ（ベース）&バベル（ドラム）に声をかけ、故人になったキーボード奏者の代わりにバベルの音大卒の息子を加入させる…。ディディエの配偶者（マダガスカル系女性）が預金全額を引き出し子供を連れて出奔したため、突然、すかんびんになったディディエ。ギーはそんなディディエを連れてパリに行き、たまたま立ち寄ったピガール地区のカフェで、1970年頃に別のロックバンドのマネージャーだったナディール（アラブ系、たぶんギー&ディディエと同年代）と再会する。ナディールは4人組を必要とする大仕事を提案する。ナディールの息子ジミー（30歳前後）がリズムジン運転手として送迎しているアメリカ人成金女性がパリでホテル滞在しており、彼女が部屋に置いている宝石や数千万ユーロ&ドルの現金を奪う計画。ギーとディディエは見張り役。

強盗は非暴力的に成功し、ナディール、ジミー、ギー、ディディエはアントワープで宝石を売りさばいてパリに戻る。ナディールの妻/愛人マドの経営するカフェで、4人が（怪盗ピンクパンサーが白髪になった）グレイパンサーズの快挙に酔いしれていると、散歩の途中でたまたま店に入ったパトリックが聞き耳を立て、メディアで話題になっている事件との関連性を見抜く。極左ジジイにとって、19世紀末~20世紀初頭の無政府主義者やボノ・ギャング団のような民衆に奉仕する犯罪、搾取されたものを個人的に奪い返す行為は決して悪ではないのだが、やたらと嬉しそうな同年代のロック・ジジイたちに対して密かな嫉妬を抱く。パトリックの通報を受けて、ナディール逮捕、ジミー指名手配。決して口を割らないナディールのおかげで、ギー&ディディエは静かに暮らせるだろう。マドはナディール出所後、森に埋めた大金を回収するだろう。（オレ2019「2.1.2：推理小説的要素」の

註で触れた、ウドリースの短編小説「ソフィー・ジョコンド」では、語り手・主人公によって盗み出され、その恋人によってズタズタにされた「モナリザ」がペール・ラシェーズ墓地に埋められる。トランクを埋めるというモチーフが、2013年の短編小説では芸術の葬儀、2017年の長編小説では犯罪小説のありがちなエピソードになっている。）

### 『グレイパンサーズ』の文明論

ディディエが、インターネットに時間を奪われることによって何の情熱も持てない現代の若者について多少の同情をもって語ると（Eudeline 2017, pp. 118-119）、ギーが次のように分析する。「彼らは、恐怖しか教えない世界、失業とエイズしか話題にならない世界で成長した。失業とエイズだけが将来の約束。少しずつ全てが禁止されていった世界。[...] たしかに今でもニルヴァーナやオアシス [の音楽]、ウエルベックやデバントの本、デヴィッド・リンチの映画、ジェフ・クーンズ [の彫刻] が好きな若者がいる。でも、この人たちだってもう新人ってわけじゃない。登場したのは、しばらく前、インターネットが全てを吹き飛ばし全てを均一化するより前。オレはもう終わりだと思う。少なくとも10年後は虚無、虚無。何も出て来ない、何も登場しない。」（*op.cit.*, p. 163.）現代の若者は金儲けのためにインターネットでザッピングした言葉や音をまとめることしかできないから。ここで現代のクリエイターとしてデバントに積極的価値を付与していることが注目される。もし「ウエルベックやデバントの本」ではなく「ウドリースやデバントの本」と書いたら、少なくともギャグとしてウケただろうし、『素粒子』で（ミック・ジャガーの表象として）悪魔主義のミュージシャンを登場させたウエルベックよりもウドリース自身の方がずっとロック・カルチャーに通じているはずだが、結果として、それを避けたわけだ…。

このように、デイドロ『運命論者ジャックとその主人』を想起させる登場人物どうしの会話として、ギーとディディエが文明の終焉を論じている。登場人物ギーは1970年頃、パンク以前のハードロックを演奏していた（その後、パン

クになるにはジジイ過ぎると思った)のに対して、著者はセックスピストルズのフランス公演に随行してすぐフランス最初のパンクバンドのひとつアスファルトジャングルを結成した、という立場の違いはあるものの、著者が同年代のロック・ジジイ登場人物に自分の歴史観の一端を仮託していると思わせるだろう。『爆弾の降りしきる下で踊ろう』(2002)において、最新のコンピューターを活用してメールを盗み見たり、自分の新曲をヴァーチャルアイドルに歌わせてカムバック(初音ミクの先取り!)しようとしたりする男性主人公を描いたウドリーヌだが、今や情報科学に見切りをつけたのだろうか。インターネットを文明に対する最終兵器と見なしているのだろうか。

### 『アヌーシュカ1979』の物語

背景は、1975年を回想するプロローグ以外、ひたすら1979年パリ。シド・ヴィシャスが死んだ2月以降。語り手・主人公「僕」は19~20歳(1959年生まれ)のシモン、父親が非常に有名な俳優(シチリア系)であり、どこに行っても「有名人の息子」と見なされる。母親とは死別、兄は自殺。パパの仕送りによってバスティーユ地区のアパルトマンで過不足ないひとり暮らし、パリ第7大学の学生証を持っているが通学せず(退学になったことすら知らない)、ときどきジャズパンクバンドでサクスを吹き、たいてい(パンクからニューウェイヴへと移行しつつある)ロック界をブラブラしている。アスファルトジャングル、タクシーガールなどパンクバンドのメンバーたち(アスファルトジャングルのパトリック・ウドリーヌやリッキー・ダーリンが副次的登場人物になっている)、アラン・パカディスやイヴ・アドリアンといったサブカル批評家とすれ違う(本誌第44号の「フランスのパンク文学③:パトリック・ウドリーヌの文学的モデルたち、ジャン=ジャック・シュール、イヴ・アドリアン、アラン・パカディス」で論じた3人のうち2人が副次的登場人物になっている)。「僕」は、アスファルトジャングルをクビになったベースリスト、リトンに同行して、盗難車でレコードショップに行き、レコードを万引きし、それを転売してヘロインを買う…。

「僕」と同年代らしい2人のパンクガールとの出会いと別れ。まず金髪美少女アヌーシュカ、次に黒ずくめゴシック系のデボラ。

アヌーシュカは、何度か「僕」のアパルトマンに来てヘロインを打ってファックした、その後で行方不明になり、「僕」は彼女を探してパリを右往左往する。その過程で次のようなことが分かる。アヌーシュカは本名、父親はモルモン教徒アメリカ人で離婚&帰国して音信不通、母親はロシア系ハーフ(バレエダンサーだった祖母がソ連から亡命した)で女性誌ライターをしながら瀟洒なアパルトマンのクソ金持ち生活に満足している。アヌーシュカは、そんな母親と対立してピガール地区でストリッパーのアルバイト、そして、心の通う唯一の存在だった兄が死んだ後に家出、ヤクザと一緒に実家を空き巣、ディーラーから金品を盗み、身を隠すために「僕」のアパルトマンに来た。兄の死、片親の不在という共通点…。

「僕」はアヌーシュカ探索の一環として、デボラと一緒にLSDを摂取してモード系スーパーリッチ(カール・ラガーフェルト?)主催のダンスパーティに行く。デボラの身の上話によると、キリスト教系新興宗教のコミュニティで育ち、資金集めのため母親と一緒に売春をさせられていたが、祖母を頼って逃げ出した。祖母の資産であるセーヌ河岸の古風なアパルトマンに住んでいる。「僕」は、デボラのキリスト教的教養とLSDに影響されて、聖ドニが自分の首を持って歩く姿を見る。深夜、彼女のアパルトマンに行きファックする。朝、目覚めてみると、彼女が息をしていない。心臓麻痺?脳梗塞?ラリった「僕」が殺して、それを覚えていない?とりあえず外傷はない…。救急車や警察を呼ぼうかと思ったが、結局、怖さのあまり逃げ出す。

数日後、「僕」はパリ警視庁への出頭命令を受け、殺人容疑かと思ったら違った。アヌーシュカについて質問される。彼女が売春・空き巣・麻薬密売で捜査対象になっており、そこに母親からの捜索願が加わったらしい。成人を対象とする捜索願は後回しのフランス警察だが、2人組の刑事の示唆した、ベルヴィル地区の犯罪組織を摘発することが目的らしい。(礼儀正しい刑事&粗暴な刑事のコンビは、サンアントニオ警視

&ベリユリエ刑事の末裔だろうか。)ネネッス・ベライッシュ(25歳前後)というカピール系ヤクザの写真を見せられた「僕」は、アヌーシュカを救うために勇気を振り絞ってベルヴィル地区に行く。ネネッスの叔父(であることが後で分かる)フランク・ゼムールの床屋・麻薬密売店に入る。フランクに散髪してもらった後、ネネッスにボコられる。大発見したつもりで連絡すると、刑事は全てお見通し。捜査の邪魔です。

逮捕①。さらに数日後、警察が自宅におしかけ、「僕」は逮捕される。今度こそデボラの件かと思ったら、なんと、アヌーシュカを殺して死体を隠した情痴殺人の容疑。アヌーシュカの母親がそう思い込んだらしい。また、ネネッスやフランクには政界に強力なコネがあるらしい。「僕」は「僕」で父親の強力なコネを使って、超有能な弁護士を呼んでもらう。2日間の拘留のあと自宅に戻る。しかし、新聞雑誌が「フランスのシド・ヴィシャス」に関する風刺記事を掲載し始める。「僕」の写真が新聞に載るが、ちっとも嬉しくない。

逮捕②。ふたたび警察が来襲し、「僕」はついにデボラの件で逮捕される。殺人容疑であり、彼女の部屋に残された指紋や精液が証拠になりえる。今度は、弁護士の超有能さをもってしても2日間の拘留では済まない。結局、独房と医療刑務所で3ヵ月過ごした後で帰宅。新聞雑誌はアヌーシュカとデボラの件を合わせて、有名俳優の息子がセリアルキラーになった、などと書き立てる。語り手が弁護士の戦略を理解できないという設定ゆえに分かりにくいのだが、殺人容疑が晴れても、救急車や警察を呼ばなかった救助義務違反が残ったのだろうか？(ところで、2003年7月26日深夜、ベルラン・カンタとマリー・トランティニャンが酔っ払って夫婦喧嘩した後、後者が眠ったまま脳内出血を起こし、移送先のフランスの病院で8月1日に死亡した事件は、リトアニア刑法で裁かれ殺人罪禁固11年が確定したが、もしフランス刑法で裁かれたら、夜のうちに救急車を呼ばなかった点で救助義務違反だっただろうか。)

エピローグ。みずから行方不明になることを選んだアヌーシュカは、ネネッスのコネでレバノン系スーパーリッチのヨットに乗ってオリエ

ントに旅立ったのかもしれない。(アヌーシュカの行方不明は、オレ2019「3.3.4:音楽活動の苦悩」で触れた、ウドリーヌ『マルティール通り』(2009)のジェロームと同様、アラン・カン Alain Kan 失踪事件からインスピレーションを得ているにちがいない。ブラジルに渡ったジェロームの場合は、ほぼアラン・カンそのままのパンク世代の男性歌手、オリエントに渡ったらしいアヌーシュカの場合は音楽活動の枠が外され女性キャラに変更されている。)

### 『アヌーシュカ1979』の文明論

ウドリーヌにとってパンクロックこそが文明の最後の輝きであり、金髪のパンクガール、アヌーシュカがその象徴。黒服のパンクガール、デボラが不慮の死を遂げる一方、アヌーシュカは生き延びている(らしい)。

「僕」=シモンが独言する、「20歳になった今の僕にはよく分かる、これは単に1970年台の終わりではなく、当たり前だが、何かの終わりだ。とりわけ虚無の始まりだ。あらゆるものがそう叫んでいる。ああ、でも人生は続く。ヒット曲が出る(「マイ・シャローナ」)。雑誌が創刊される。確かに、パンクは埋葬された。シド・ヴィシャスがオーヴァードーズで死んだ日がパンクの葬儀だった。でも、パンク万歳!ヒッピー万歳、ロッカー万歳、サヨク万歳!僕には分かり始めた。そうした全ては完全に死んでいるのに、まだ息をし身動きしている。そうだ、肉体が腐り始めても、死者の爪は伸び続けるかもしれない。」(Eudeline 2020, p. 133.)

著者よりも5~6歳若い設定ながら著者の歴史観を代弁しているらしい語り手・主人公が、そのように、パンクのみならず、『グレイパンサーズ』のギーのような)ロッカーや(同じくパトリックのような)サヨク gauchistes がゾンビ化したことに積極的価値を見出している。引用の最後の部分はほとんど、ウドリーヌの最初の小説『おまえは今世紀とともにくたばるだろう』(1997)の結論、「芸術とは、死を越えて伸び続ける、死者の爪のようなもの」(Patrick Eudeline, *Ce siècle aura ta peau*, Florent-Massot, 1997, p. 154)の繰り返しだが、1997年作品においてマリーが本当に死んだのに対して、2020年作品の(デボ

ラは死んだものの) アヌーシユカは行方不明なのであり、1997年作品は「死者」という点を、2020年作品は「死を越えて伸び続ける」という点を強調しているように思える。1980年代以降、文明はゾンビ化して腐ったまま身動きを続け、文明の頂点としてのパンクロックはどこかに身を隠している…。

アンチモダン派の人々は、アントワヌ・コンパニョン『アンチモダン』(2005)の言うように、(過去の理想を再現しようとするのではなく)永久に失われた理想を哀惜し続け、全ての進歩主義者を罵倒する。ウドリーヌはシャトブリアン(『グレイパンサーズ』のエピグラフで『パリからイェルサレムへの道』が引用されているシャトブリアン)の後継者と見なせるだろうか。「おそらく諸国民の創造性は枯渇して行く。それは、全てを生産し、全てを踏破し、全てを味わい、過去の傑作群に飽きて新しい傑作を生み出せなくなる時、動物化し、純粋に身体的な感覚へと退化する。」(Eudeline 2017, p. 7; Chateaubriand, *Œuvres romanesques et voyages*, t.2, Gallimard, «Pléiade», 1969, p. 887)

おわりに

『グレイパンサーズ』(2017)と『アヌーシユカ 1979』(2020)によって資料体が拡大したことを受けて、オレ 2019の提示したポピュラー小説作家ウドリーヌの評価を次の3点で修正したい。

①オレ 2019の「2.1.1: 推理小説的要素」。『おまえは今世紀とともにくたばるだろう』(1997)において主人公の起こした殺人事件に関する警察捜査が言及されないなど、ウドリーヌには推理小説的要素が見出しにくい、と論じたのだが、2017年作品において、パトリックが通報してナディールが逮捕される、そして2020年作品において、警察がアヌーシユカを捜索し、2件の殺人の疑いで語り手・主人公を逮捕するのであり、物語のパネとしての推理小説的要素(警察モノ)が重視されるようになったと考えざるを得ない。行方不明のビデオを(警察モノではなく探偵モノとして)探す、デバント『ヴェルノン・シュビュテクス』のように。また、2020年作品は、ロック界にも裏取引のため警察に情報提供する

やつがいたことを指摘している。パカデイスが情報提供者だった?(Eudeline 2020, p. 162.)

②オレ 2019の「2.2.1.5: 多文化的パリ」。『マルティール通り』(2009)の音楽プロデューサー、シューラキがパリ生まれの北アフリカ・ユダヤ系であることが示されている以外、ウドリーヌのそれまでの登場人物は出自が明らかにされるのが稀だったが、今回扱う2作品には出自への言及が多い。2017年作品のナディール・メラベ(献辞相手でもあるが、実在の人物なのだろうか)は北アフリカ生まれらしいアラブ系。その息子ジミーはパリ生まれのアラブ系ハーフらしい。2020年作品の語り手・主人公シモン・ジャンニーニはパリ生まれのシチリア系、アヌーシユカはパリ生まれのロシア系クォーター(またレズビアンである可能性が示唆されている)、ベルヴィル地区のギャング、ネネッス・ベライッシュはパリ生まれらしいカビール系…。出自を語るのはウドリーヌのダンディズムに反するらしい、という見解は撤回せざるを得ない。ウドリーヌはデバントのように多文化的パリを積極的に描くようになったと言える。

③オレ 2019の「4: ルーザー」。ウドリーヌとデバントの主要登場人物の特性として指摘したルーザーだが、『グレイパンサーズ』のギーは、印刷業で一定の成功を取めて退職した後、孫の生活費を援助したりムーンシャイナーズの再集合のためにヴィンテージ楽器を買ったりしているので、ルーザーとは言い難い。悠々自適のロック・ジジイ。強盗の見張り役に成功し、逮捕されない。印刷業はインターネットによって滅ぼされるかもしれないが、ギーは(デバントのレコード店主ヴェルノンのように)倒産したわけではない。ディディエは妻によって子供と貯金を奪われた点ではいかにもルーザーだが、住む家は残っているし、強盗の見張り役に成功する。ナディールは禁固刑になるが、最後の仕事によって伝説になるだろう。『アヌーシユカ 1979』の「僕」=シモンは、「有名人の息子」としてパパの仕送りで暮らしており、アヌーシユカの失踪と自分の裁判の心理的影響で廃人になる可能性もないわけではないが、むしろ「死を越えて伸び続ける」という歴史観によってノホンと生き延びることが予想される。「フランス

のシド・ヴィシヤス」をめぐる報道はともかく、裁判自体は勝訴。パパが死んだら借金しかなかった、という場合以外、(デバントのヴェルノンのように) ホームレスにはならないだろう。ルーザーというよりボンボン。

そう言えば、オレは『アヌーシユカ 1979』の語り手・主人公とほぼ同年代で、1979年には(アスファルトジャングルもヘロインも LSD も知らず) 予備校に行かずロックバンドもやらず、セックスピストルズを聞きながら東京の場末をブラブラしてたっけ…。1977年の音楽や詩は複製芸術として、1979年にも聞けたし、2022年にも聞ける。現在でも(おそらく未来でも)、過去の芸術から出発して小説・映画・マンガなどを創ったり、過去の芸術を文化史的に論じたりできるのは、「死を越えて伸び続ける」芸術のゾンビ性のおかげだろうか。

(市川裕史・本学准教授)